

瀬川両岸一覽

一ノ船之部
上

ル 4

4992

1



門 4992
號 4992
卷 1

浪漫長橋二百弓春陰未霽是
何虹金城卷雨吞斜日碧殿穿
雲雉大空千店閭閻撲地列一
條周道到京通年々眺望思無
盡南國魚鹽壓洛中

洞雲



大坂

八軒家

大坂の

名也

笑雀

夕の月

笑雀



八軒屋畔

客乗船三

入橋頭薄

暮天多少

行人逢底

夢一齊輾

破水輪造

後崎柴



大坂

難波津とりの浦海濱にありて一六難波人難波男難波女未の古御多し
又浪速國に神武帝の御宇より古名あり

大坂とりの號上古に聞えぬ按ずるふ大江坂の畧訓ありんり

とりの説ゆりもゆりんり大江の難波江の一名ありて人王十七代

仁徳天皇第一の皇子と大江伊耶本和氣命と申は 文禪の後ハ
履中天皇と

此時大江の号初に聞ゆ抑當津ハ海陸の都會天下の

要衝として西列の喉口 皇初の園城より群峯右に繞り平野左に

連る激水の内は貫き江海外と抱く山川の明麗田野の壤腴海

濱の廣舟澤國の佳致として他邦は類せぬ故に諸國の米穀

石及び和漢の雜貨あはれ着船して朝の市暮の市街に器

縦横四衢の賑はる事海内は冠たり

難波橋

浪花三大橋の一なり南詰ハ船場北濱より北詰ハ西天満は架ゆり
長と百十四間六尺欄檻天守のむく連りもぐる壯觀あり

山州淀河の下流浪華は入天満川と号は當橋の下より中の島と

分隴し北と裏川とひ南と土佐堀とひ世俗俱に大河と呼ぶ

中の島の東の寄と山崎の端と号は此所より東方の瞻望佳景に

風流の貨食家富家の隱居所なりとありて無雙勝地なり夏夕ハ

納涼の遊糸船水面は元橋と橋上の往來兩岸の茶店賑はる事

言もろくく〜 柳々堂云橋の百丈〜 水あり〜 流れ日ハ金城の
上は出〜 影孤舟と沈む 藤よ此物と浪花第一の美景といふも
よ候し〜 小舟〜 云

長と夜もり〜 終バ明ぬ難波〜 獅子堂

金相場濱 難波橋の南詰東より 浪花市中の両替屋日毎よあ〜 小集り

金の賣買とす〜 相庭と立〜 金の價と定む浪花の一奇なり

赤地 金相場の東より 此地の僅の地所といふも 旅宿貸食家貸座敷あり

あり〜 何れも清ら〜 風流〜 天明三年 橋地あり〜 今のや〜

東堀 築地の端より 大河と引〜 南に流り 天正十三年 所鑿と〜 委〜 東横堀

神橋 難波川の 丁あり川上より 第一の大橋あり 長と百二十二間三尺高欄 翹々

當橋の通ハ北ハ十丁目條より 長柄と通ハ 京師よ登る西街道よ

至り南ハ松屋町通より 下寺町よ至る道條あり 都鄙の行人

往返引もき〜 恰も櫛の齒とゆ〜 如〜 殊更北詰よ青物の

市場ありて 朝毎の群集雲霞のご〜 其賑ハ言語〜 絶ハ天満宮

系流の通路より 故ハ斯ハ号らるるものあり〜

八軒家 天神橋南詰の東より 京師上下の船着ありて 船宿の〜 連〜

京師への通船の浪花市中の舟より当船岸と第一所謂
三十石の昼船夜船今井船の東雲の頃、纜を解く伏見に着岸の
早きと譽へたる程、夜舟の下で速く秋の肉を着合井船の
一番未明の發し夫より二番昼舟夜船の上で終船の凡支の刻よ
及べり又昼船の下での遅きも初更と過るといれ其閑静なりと
僅に二時を過げ頗る繁花の地より傳云此地の古歌は渡辺や大川の岸
と詠ぜし名所ありとて
委しく摂津名所會大成よ
出せざるに畧れ

秋の夜ふの火の岸もまごころ〜
茶夕

天満橋 八軒家の東より河上第一番の大橋なり長と百十五間五尺高欄

大河筋又鯉江川古大和川平野川猫間川等合流してある

會は當橋より天神橋難波橋と以て浪苑の三大橋と稱す

今も満つ天のそとと踏む〜
洪々

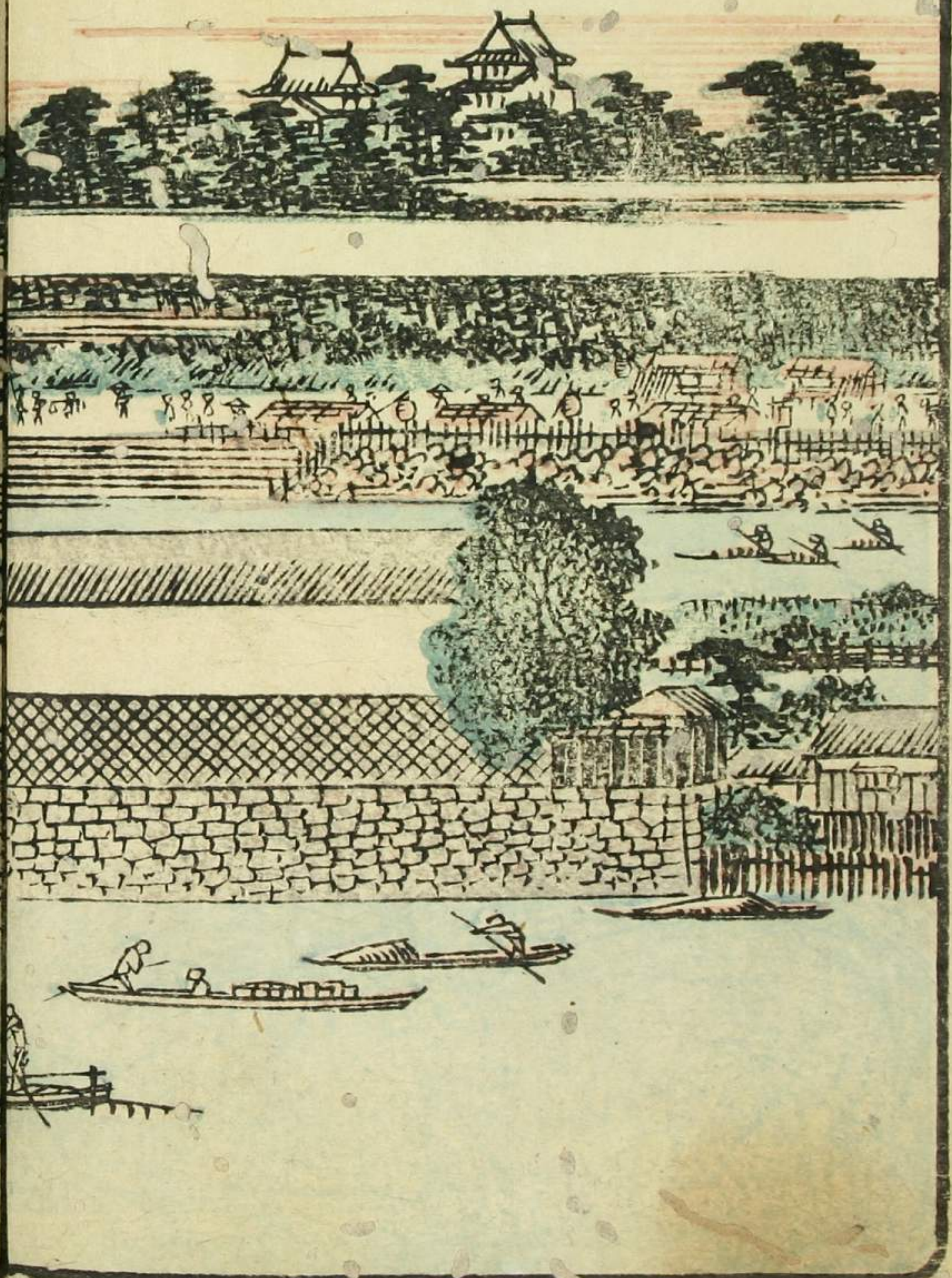
松之下 天満橋南詰の東より一町余の間土堤に並木の松あり故に名する

此地の原京橋一丁目と号して人家建つれ〜と享保八年

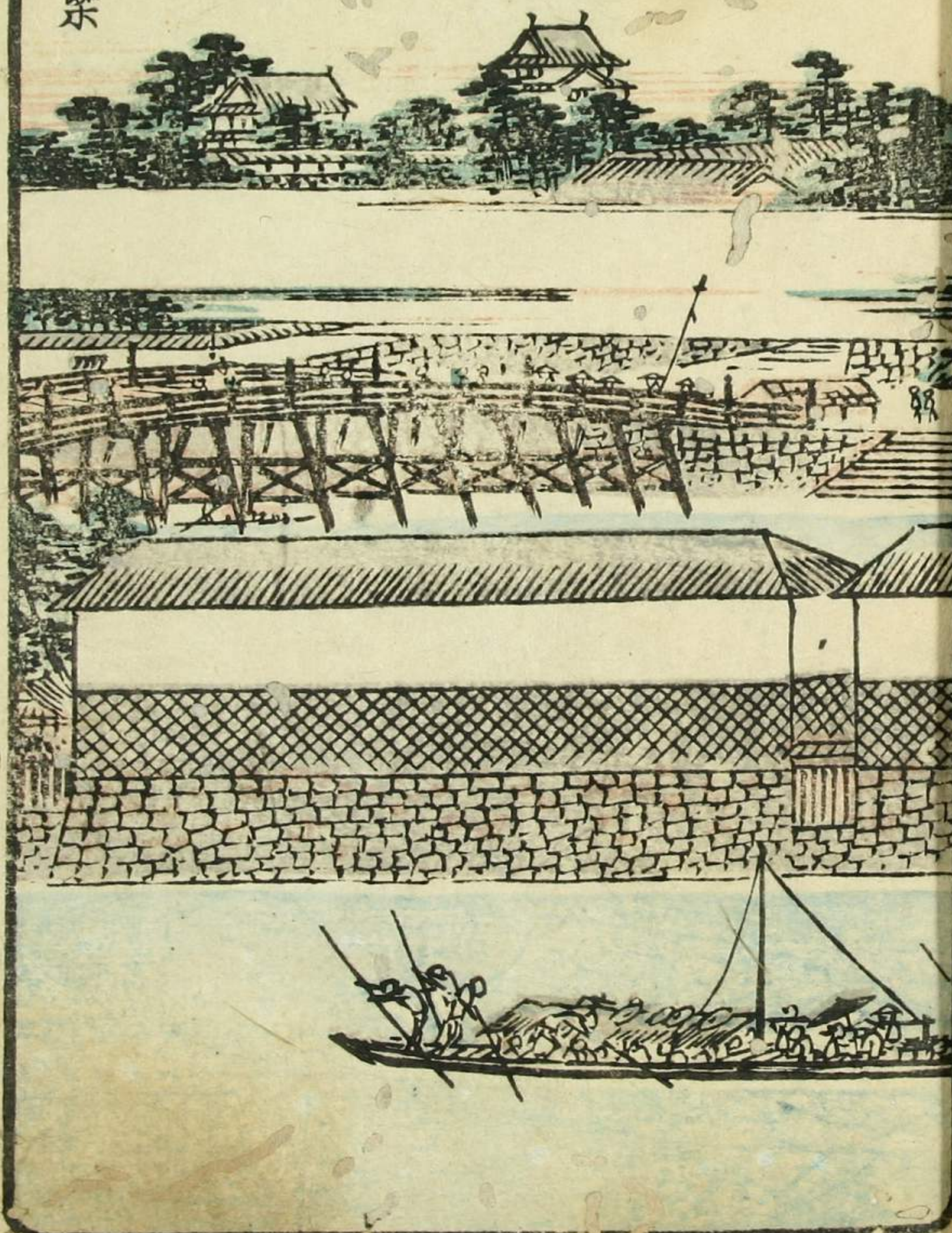
所習りて道頓堀吉元湯門町の裏手へ移されより今の如く

明地と名けり吉元湯門町の後方と本京橋町と号する此習なり

松之下
京橋
豊前嶋



木下人
為天下
君威名
遠向外
夷聞層
城萬仞
凌霄漢
逆指朝
鮮八點
雲



箕崎縣

其三

網嶋



風急捲寒

濤空水點

難別西北

雲纒開連

山悉作雪

釋慈周

枕のまゝ

後りまゝ

まゝ

沙鷗

川上
七

其四

城北網洲
漁父鄉酒
樓宛在水
中央魚膾
蟹螯知不
足妓舟維
得柳絲長
荒井公廢



荒井公廢
得柳絲長
足妓舟維
蟹螯知不
樓宛在水
中央魚膾
漁父鄉酒
城北網洲

七
九

七
九

京橋

松の下の東より北詰と相生西之町と云

故大和川猫間川會流

橋下と歴く大河

入欄檻葱宝珠の銘云元和九年造立云

南方より

金城魏々赫々として松風萬歳と唱ふ北詰より朝毎ふ

川魚の市

より魚更賑々として此市場より清泉湧りて常に涌出

四百小溢る衆入

數愛説は此より東に至り野田橋と越野田町成

歴く野江村

より出ると京師往還の本街道なり

備前島橋

此橋は過書の船番所なり八軒家より是迄水上九三町許

川崎渡口

是より以下渡ると号するは此川と横川と流るる

網嶋

此地の淀川の側ありて流れる

浪花の通船

釣船細舟遊来の樓船終日往来東より河内大和の

山々見

とて瞻望ふとふ絶景なりける程は富家の別宅雅

閑居風流

の貨食家もつて頗る遊樂の雅地なりり原来此辺の

後家

常は軒端は網と干渉よりして酒多と号けしるべし

大長寺

本尊阿弥陀佛の惠心僧都の作る境内は鯉墳

滝登鯉山

あり兵と鯉鱗の奇なるもの有寺の竹物に畧之

北へ堤つ

つひ凡三町なりりやして櫻宮に至る左右櫓多し

櫻宮

細島の北あり
例祭九月廿日

所祭天照皇太神
宮づらの光景伊勢と換せり

當社の淀河の東岸あり
境内に言も更らう水辺より馬場の

堤に至るまで一帯の桜
と晩春の花の盛りの雲と見雪と疑ふ

風景あり又西の河岸の川岸より北より
長柄の里の遠

まが、此も別木されば川と狭く
兩岸の花爛漫と一帯水み

映し川風花香を送り
四方より芳しき程に都下の春

陸と歩みゆき
通ひ訊ふあり舞あり紅日西に没する

夕夕浪花は流る
遊宴の最上花見の勝地と云ふべし

接之には
右社頭の上の方あり
此渡船の跡生の花の流る有り

故に梅の
号り

源八渡

右より左の海の上より西成郡天満源八町より東生郡中野村へ
舟に乗りて中野の海へも云渡の長さ九十向と云

源八と云り梅の
燕村

中野

右より左の海の上より別梅の宮へ
當村の農家は酒肴と販ぐ

あり其塩梅部は
遊客を賞
賞遊就中泥軒汁と

以て名地とせり
花の流と始り
行月中旬と限と云

澤上江

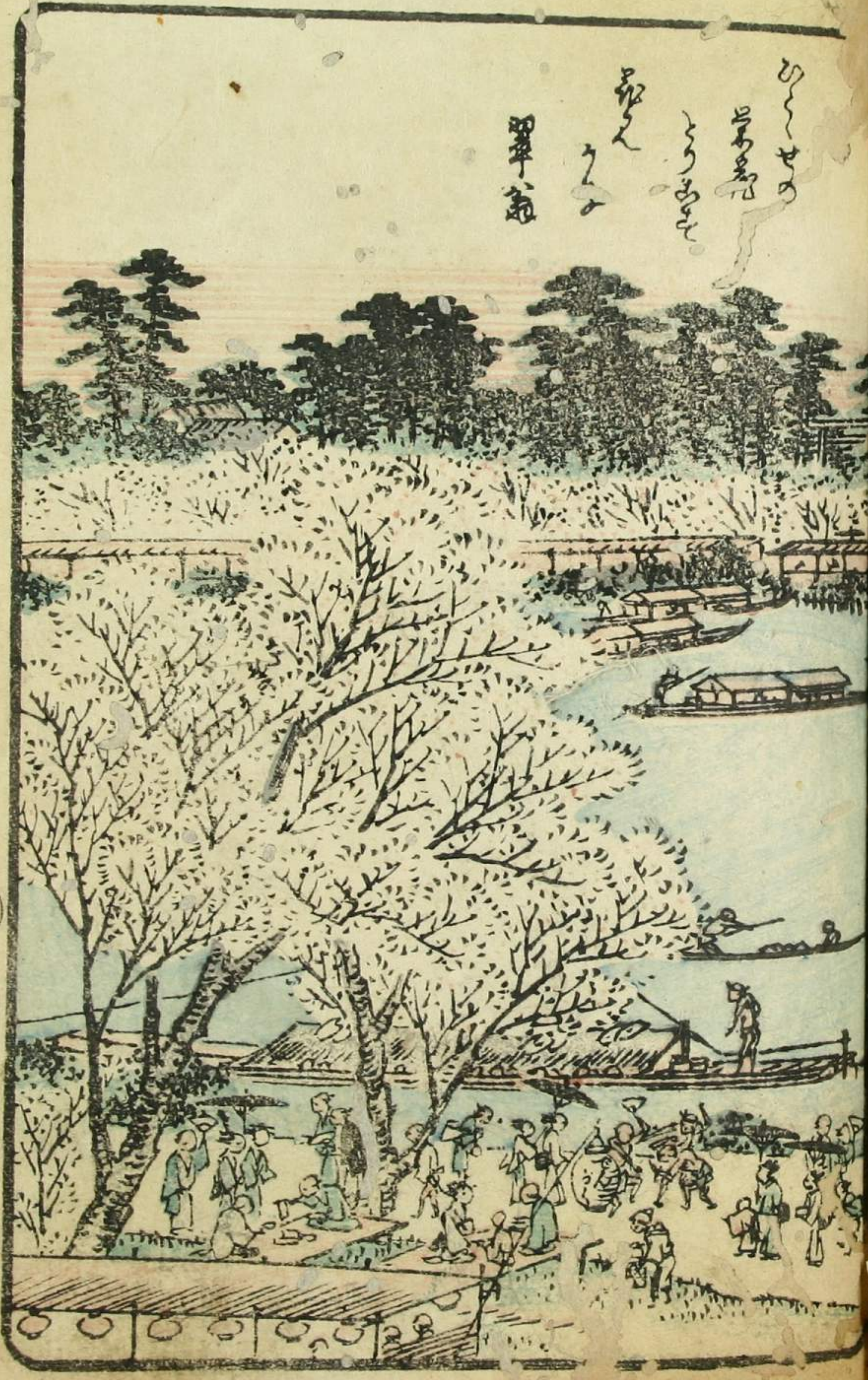
中野村の上より
高貴の人と葉
葉

川崎
櫻宮

ちりちり
はれも
やら〜細流
か〜流の
まは〜り
正格



ひ〜せの
とあ〜り
〜り
〜り
翠宮



其二

横宮の西岸ハ

天満の川寄アリ

登舟の水主ホ有ル

よう上陸一六村堤と

長柄の三頭まで凡一里の

間引のありまより船小

のりて東堤へよほり

あつこいよあ

真折

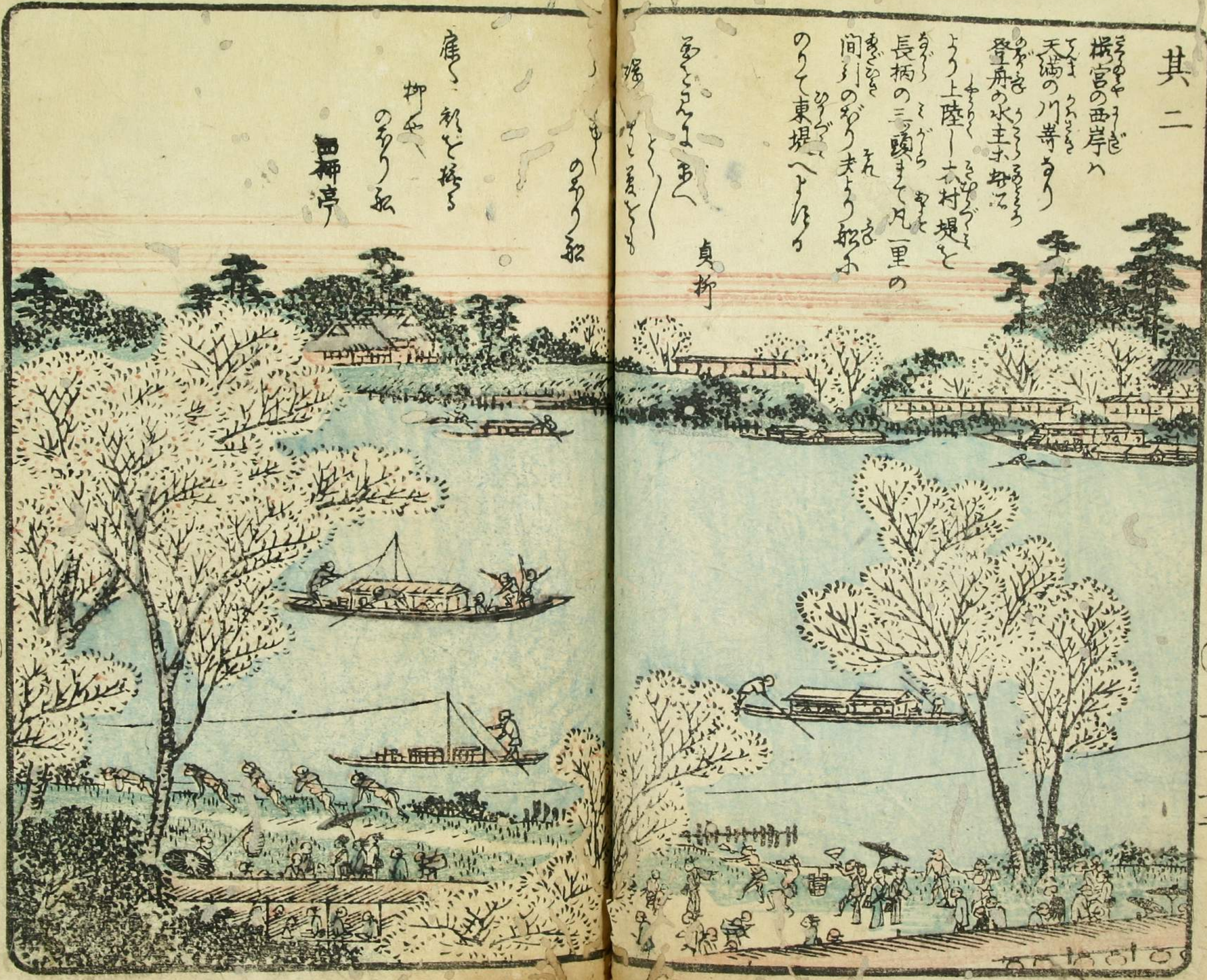
堀

のあり船

庭々 初と梅々

柳々
のあり船

田柳亭



上
三

上
三

毛馬

第二度目は西より

上船の水子ホより

志州まで井丁のちり引

のりまより好まのり

西境よりまはるの

二番より上りては

境と平田の番所の

茶を通りおはまを凡

一里八町とては川を

流るより子あふのり

上りて何處とれより

垣かど打とては

凡二里はあつて是より

あまのり十町より

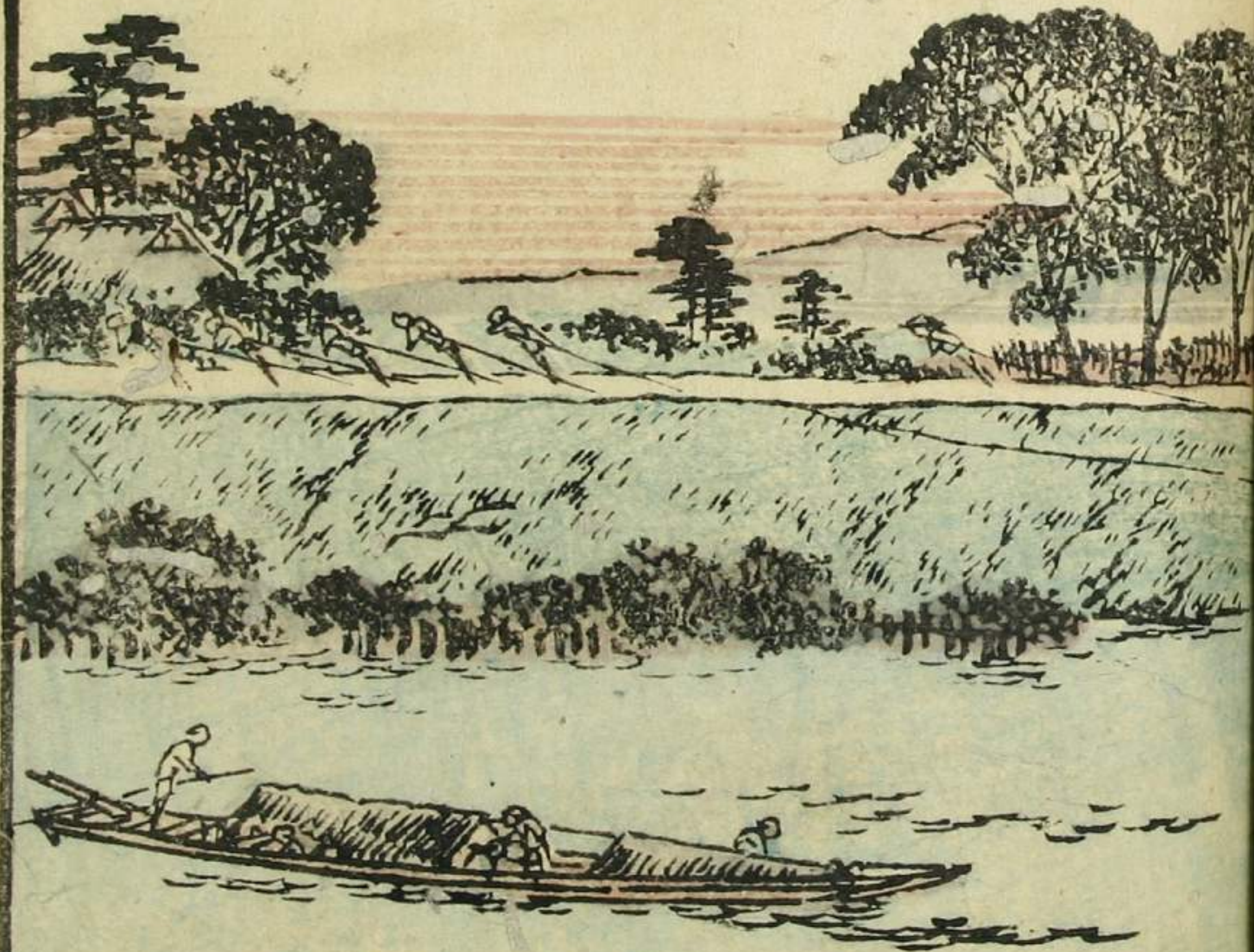
よりて東境へよき

けいりて 漢語

てんがの 煮る

つきて 船客

これとすむ



母恩寺 津上江村の法皇山と号す 本尊阿彌陀佛立像長三尺許惠心

僧都の作と舟内當寺の尼僧常綿帽子と製とると主業と

其色清白して美と好に以て名物と、世は名高し

○善源寺 津上江村の上より 寺院ありしが今の村名とあり

○友淵 善源寺村の上より 舟内當寺の書

毛馬渡口 友淵村の上より東生郡毛馬村より西成郡北長柄村への舟渡

○毛馬 右渡場の上より備前島より 此所は者賣船あり酒餅汁ホと

常くとて其風俗牧方小田 白き餅と申す

○赤川 毛馬村の上より 此地より上と出せし赤川上とて

○葱生 赤川村の上より 葱生村の上

○江野 中村の上より 中村の上

○南島 江野村の上より 南島の上

○森小路 南島村の上より 森小路の上

陸路街道大坂野田より野江関目茶屋と経て南嶋と森小路の間

出る是より表小路今市土居守口と経て南十番八番七番五番

二番一番 佐太といふ是より 仁和寺。點野太間。木屋。松ヶ鼻。出口。伊加賀。

投方禁野。磯嶋渚。下嶋。上嶋。樋之上。楠葉。橋本。樋之上。美豆。淀 大橋間小橋小橋と 下三栖より伏見肥後橋に至る本街道と

越て淀堤五十町

赤川

野も山も

そと

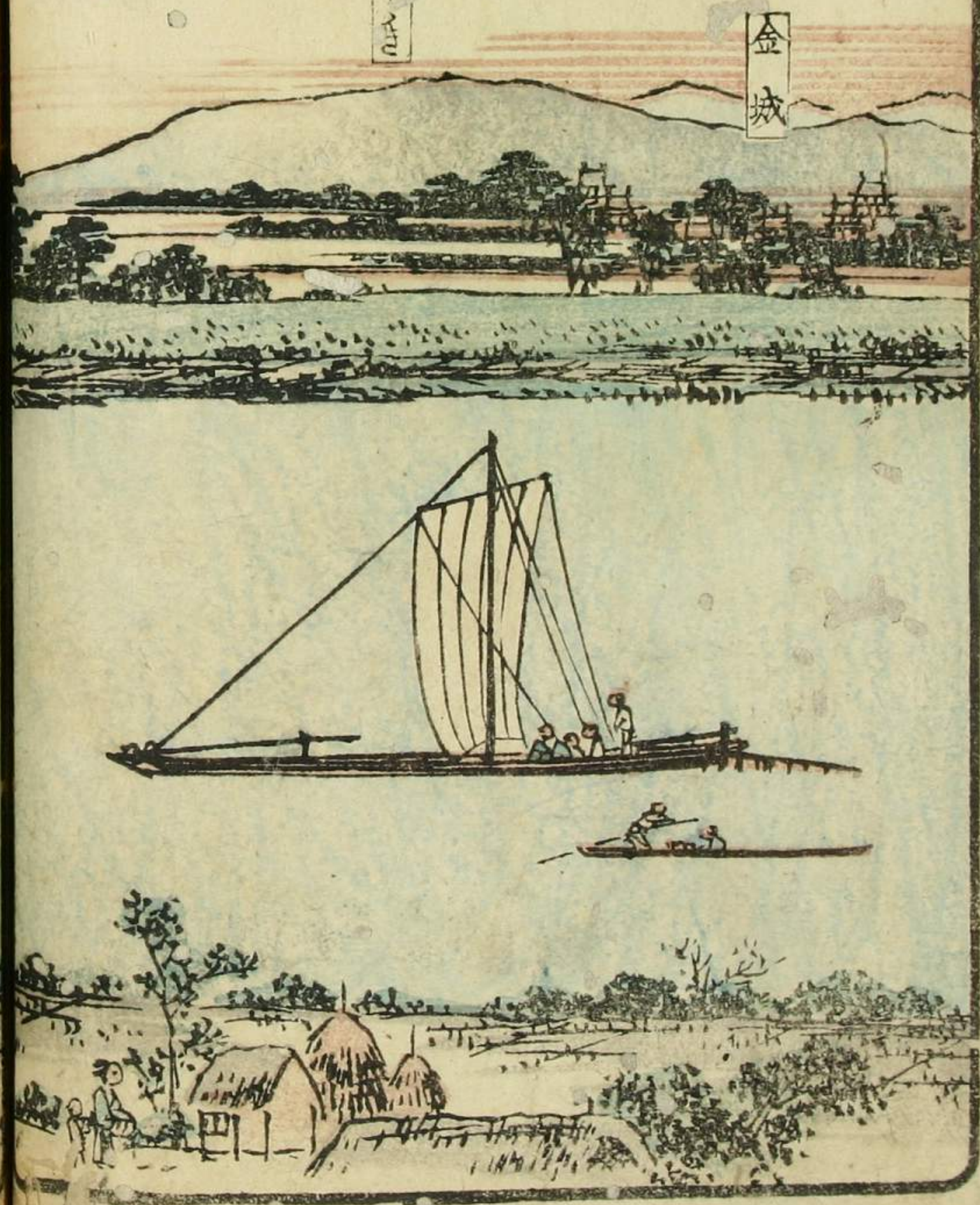
あはれ

さき

醒花

金

城



赤川の

十三里

渡川

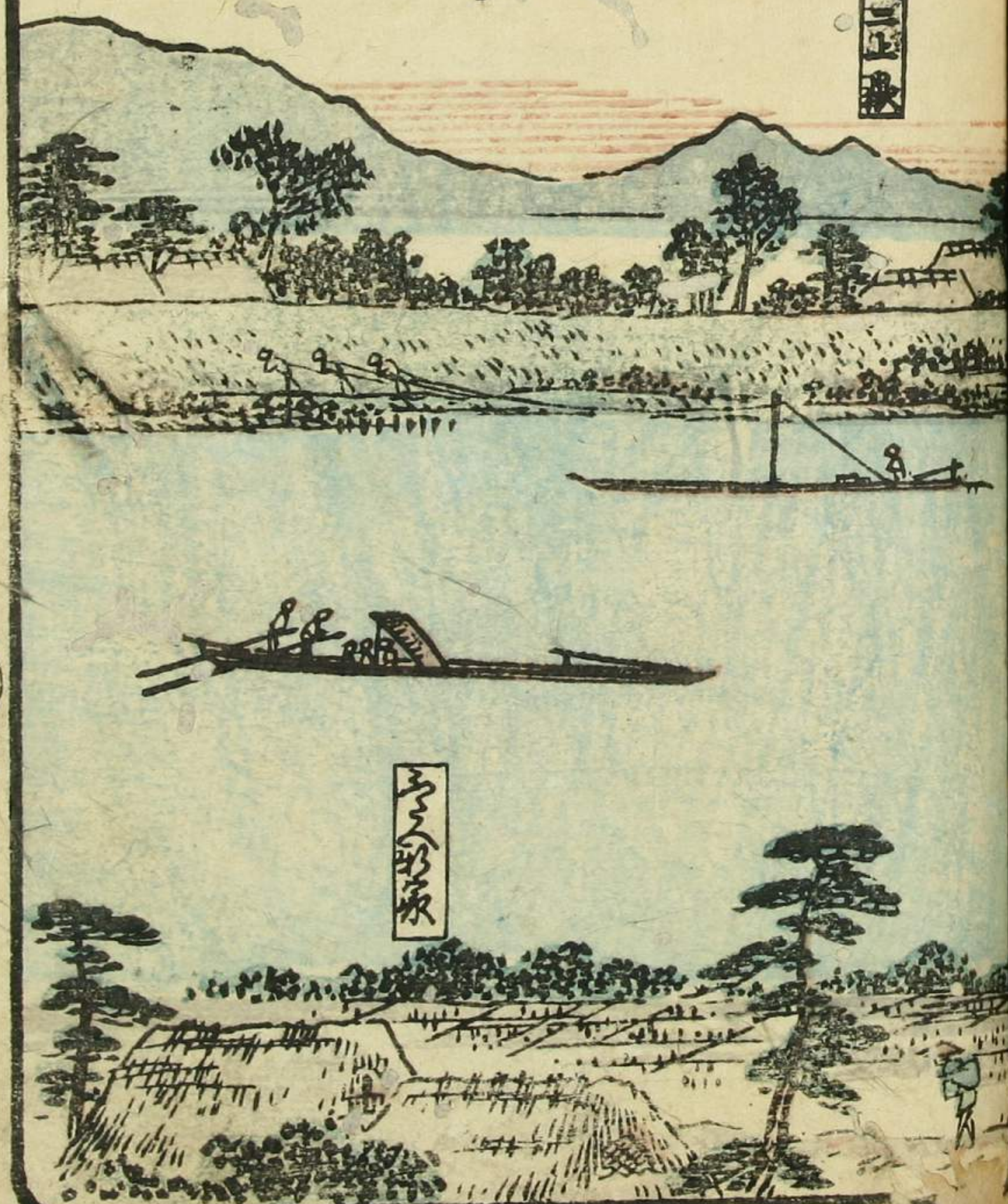
ついでに

のり合の

子

寒風

赤川



赤川

守口驛

新川

船をあれと

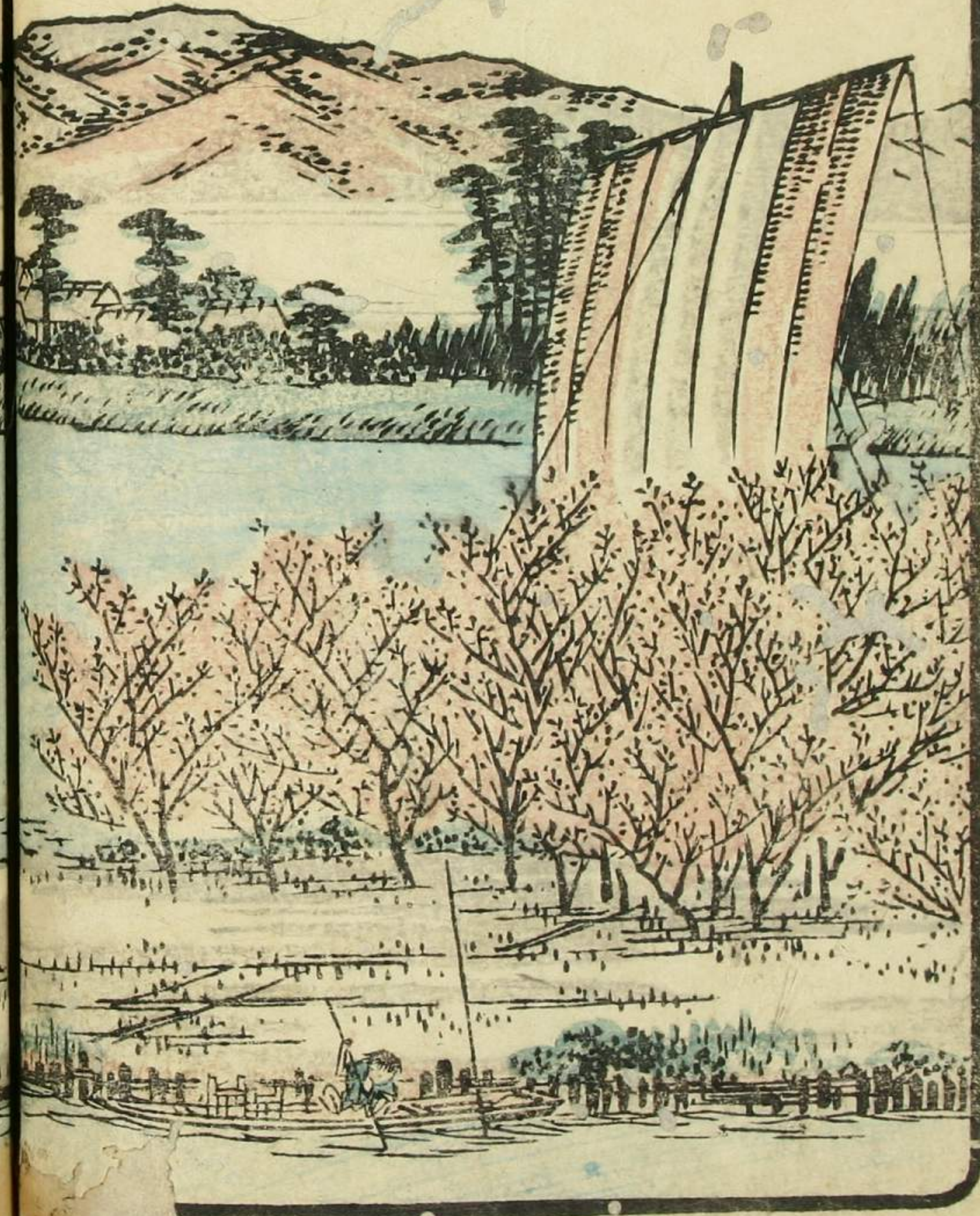
よとの堤

さくひんきり

奥うれい

さやのけ

對岸
碇任



奥堂屋

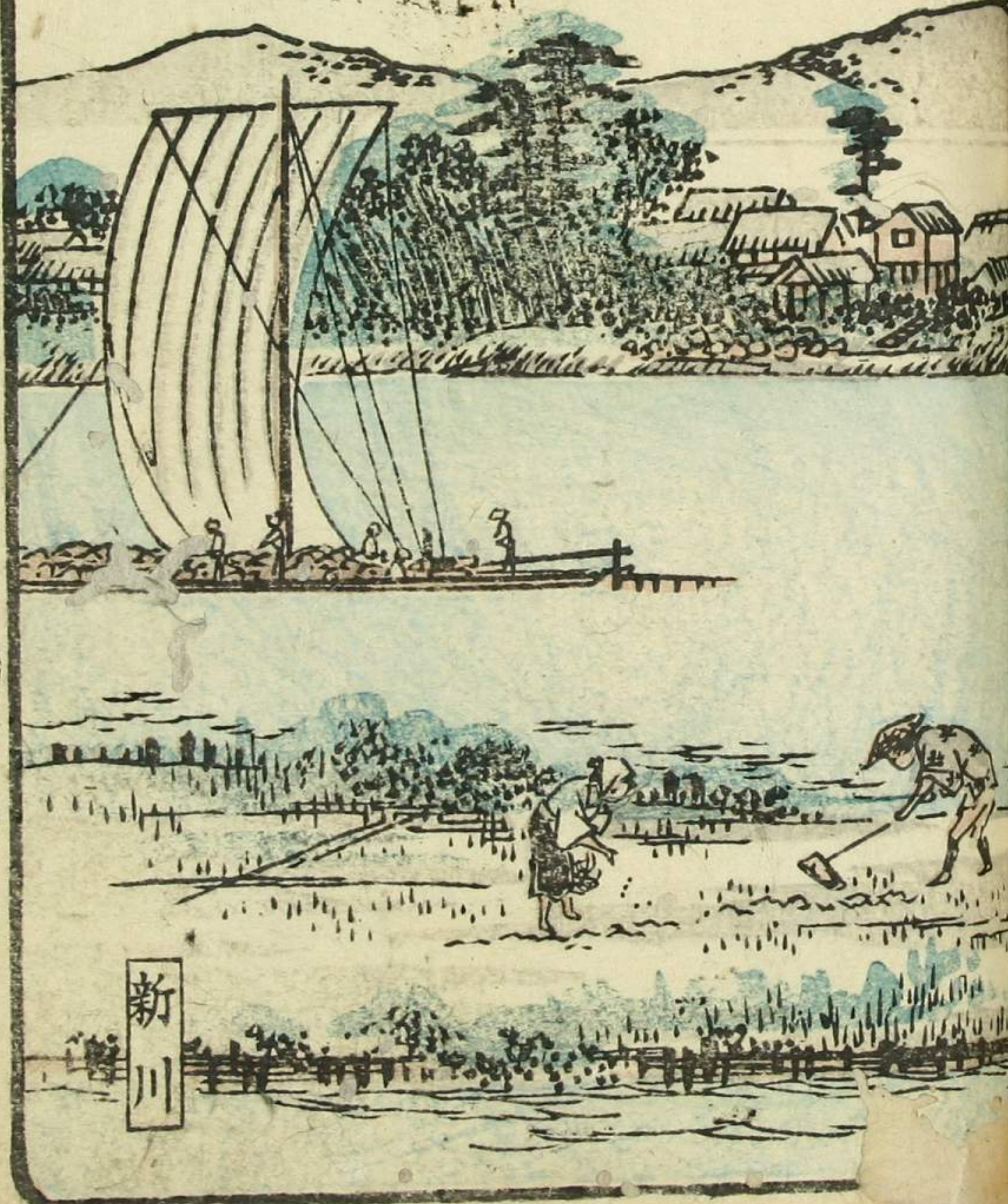
木の衣のの

谷とあし

のまじり

まはわす

百又



新川

京入或ハ竹田街道と上り又渡り横大路下上の鳥羽と經

て東寺四塚より出てもゆりおの 其方角の便宜よあそぐへ

今市渡口 今市村の東にあり 東生郡今市村 ○今市 度場の一村あり 毛馬より

攝河之國見 今市村土居村の間より 是迄ハ攝州東成郡

○土居 今市村の上より 猿嶋 土居守口の間にあり 島といふ

守口驛 土居村の上より 浪華より 京師より上る陸路の官道第一の驛

高麗橋より此地に至る行程二里 是と本街道よりハ 是より岸より程ハ 傳舎軒とあり 飯盛の女倉の支度

とせぬ夜の泊と引向屋場より人馬の掛引あげ 馬夫雲助の

声高し罵るるもど 驛路の風よして 備は地方繁昌とつと

儲亦長菜菔の糟漬ハ當所の名物として世は守口醃と号し

風味殊更は美なり 因云此長菜菔ハ生る時ハ宮前菜菔と号し

往昔ハ撰り天満天神の宮前まで田圃ありし時作せし

宮前ノ号あり然る小治元朝より此ハ漸く此地のけ

今ハ宮前といふも更なり 宮後も數十町人承りし此大根も當時ハ

長柄の辺より作るより然れども尚旧名と用いし 宮前菜菔と稱す

今有と此守に求めし 糟藏に製し守に漬とらん

○南十番 守口の上より陸路の街道へある村の法と

下嶋渡 南十番村の上より河州茨田郡下島村より摂州西成郡辻堂村へ

○下嶋 或は十一番とも号し今市より 北十番 下島村の上より 九番 北十番村の上より

三社権現祠 下嶋と八番との塚に在り 八番 九番村の上より 陸路の街道あり

一津屋渡口 八番村の岸にあり摂州島下郡一屋村より河州茨田郡八番村へ

○七番 右瀬場の止より陸路の京街道あり

白山権現祠 六番村より相殿に春日明神と祭る當村より三番四番の

○五番 七番村の上より街道の東路へ 二番 五番村の上より街道の

津嶋部神社 延喜式に出金界村より 嘉祥三年十一月從五位下と授く

○一番 二番村の上より世二佐太と云此近村一番より十番までの村名より一説に大坂

佐太天満宮 一帯に在り此地の 本社祭神菅大臣 御自作ト云

例祭六月十二日九月廿日日本社額佐も天満 好文天神祠 本社の上より

白入夫祠 好文祠の末社 稲荷愛宕とあり手水鉢井筒等ハ後彦彦内太郎が月より

勅梅 社前より後水尾帝より二枚の梅と綴るよりより由社の神木に接木する

家の風世々々傳へし神垣やまへては梅も白く

又御製の和歌と綴る

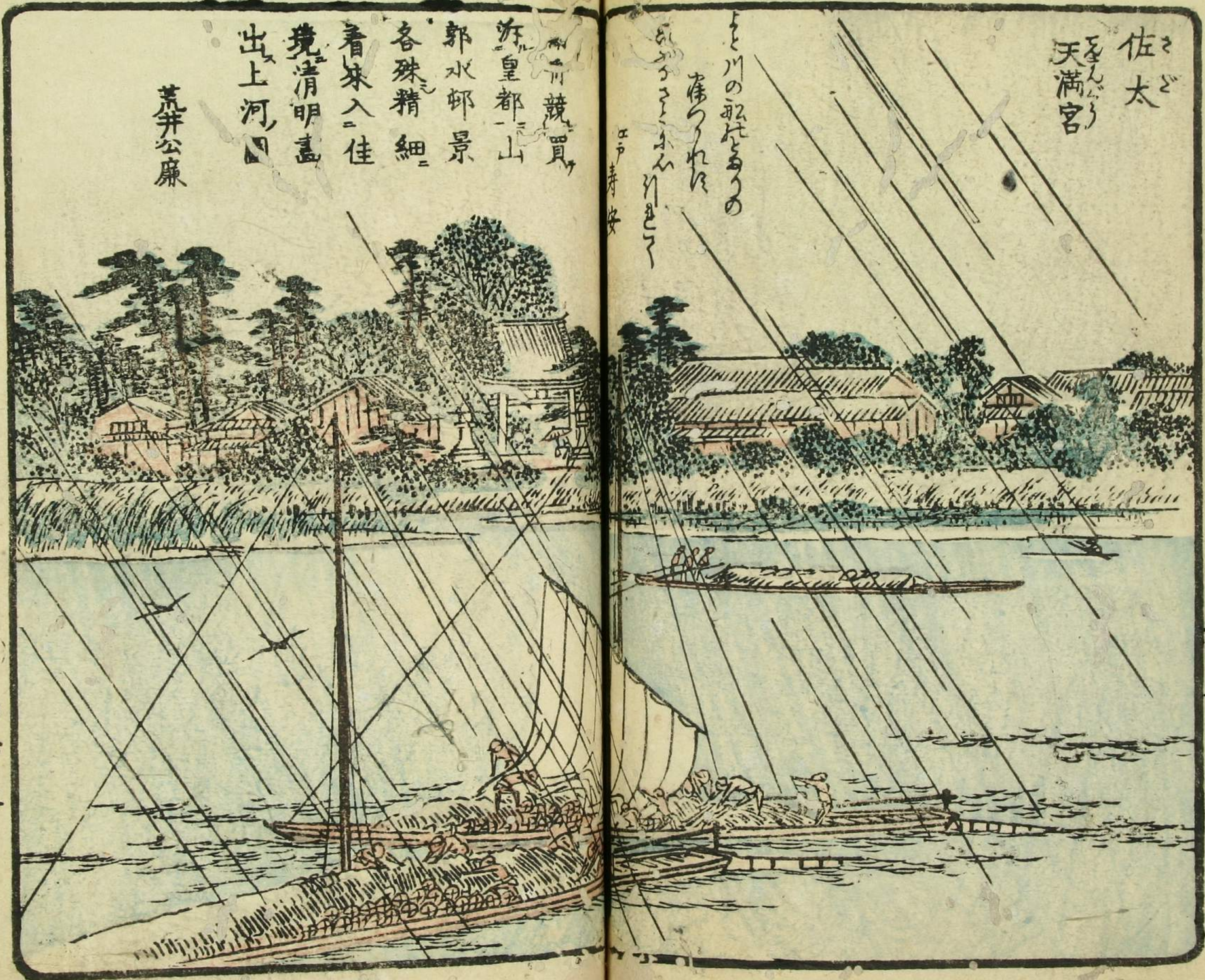
佐太
天満宮

と川の船はあつたの
岸のれは
あつたよふ川を

江戸舟安

河競買
新皇都山
郭水邨景
各殊精細
着来入佳
境清明畫
出上河

荒井公麻



上
下

竹内御門主良尚親王御副書曰

河内佐太宮の菅神の廟ありあられども近代社あり終たてし

参る奠の儀式も雅うりしと永井信列右守尚政朝臣再興せし

より壯麗目成奪ひ見らる者へそと聽とのへのせむ其頃

太上天皇百和香の梅の拍枝とて今尚政朝臣に給りしと神の

庭はげごう瑞籬の之物とてこれに依り右の御製と尚政

朝臣より給ふ即納之内陣の寶物とすぬ何の業ふこれに

かゆんされば神の徳のよきとてかれがほふとていふありし

その御製製の由未とてかればいふとて西暦をいふとて止る

事いふとていふとていふとていふとていふとていふとて

慶安元年大昌念五

北野寺勢二品親王良尚書之

抑當社の齋請へ年歴久遠とて其盥觴とてがまらば漸永徳年

中の社記と存に厥后荒蕪とて社頭も神さび瑞籬もまごころ

さりし頃慶安元年當境守戾城刈淀城主永井信濃守尚政侯

菅神と尊崇しと再び社檀と新し菅を其より神威のちとて

社頭玲瓏其頃 太上天皇後水尾名香は二枝の梅と副

御寄附ある時卯月の末つゝさうさ社前の梅は二本の枝と

接し勅のありけりや神徳のそととや奇矣なる哉二枝ともは

然と常ん時るぬ花咲実と結びゆく大君の御恵に御製の内

威徳とて神も梅もあゆ有しやと四方の人くられと拜して感涙瞻

小松社頭と群とあり原素此地に都往返の官道なれば旅客常に

清くあは淀河の流れしとて上下の船昼夜ともり往あひ

舟中より鳥居の整くくろくと見ゆるより遙拜してゆるるも多かり

守口より此所まで陸路行程一里あり

菅相寺 法大宮の後より八幡宮奥院とありて本尊十二面観世音 行基作す 蓮月

秋兼祠 本堂の傍にあり 連歌所 同上 永井尚庸墓碑 寺前ニあり 儒官崔山野の撰

紫雲山來迎寺 右同所ニ隣る大念 本尊天華阿弥陀佛 股櫃の左座像阿弥陀佛

村上帝の観音堂 十二面尊と 鎮守祠 八幡大神 星江相摸大明神 右の関山誠阿太の像傍に

夫當山本尊の來由と傳聞は摂州深江里の法明上人とて聖あり

山列雄徳山八幡宮に詣りて融通念佛宗弘通と祈るひしは康

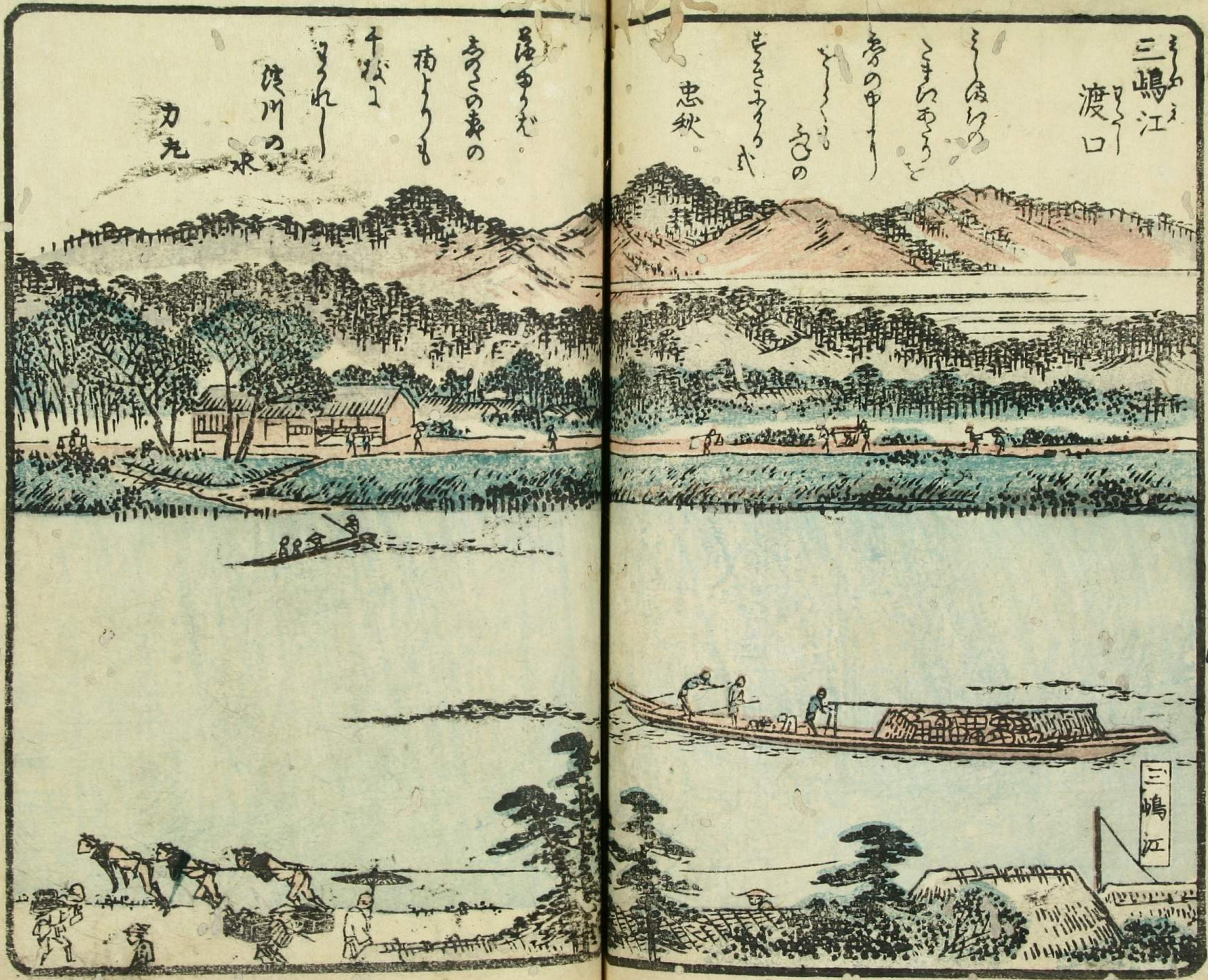
永元年六月廿三日夜石清水別當善法寺に神勅ありて曰我此山は善跡

のまゝに記す

三嶋江
渡口

さくら
の
花
の
中
の
あ
ま
り
の
時
は
忠
秋

長
手
の
あ
ま
り
の
時
は
千
代
子
の
あ
ま
り
の
時
は
力
丸



して和光の塵を掃くも時機いまだ至らざれば空しく五百餘歳と
過せり大安寺行教法師傳了天華の佛像今勅封して寶庫あり
あり當時正の時機いづれり早く勅封と解く故より深江の法明
法師は授くべしと聖告いづたされば別當此よりと奏聞し

同年七月十音宝庫より法明上人は授かり其より此本尊と
融通念佛宗の本尊として海内と弘通し其の今の本尊

これより 松州平野郷中大念佛寺の本尊も石清水八幡宮より法明上人は授けま
よ縁起も大略おぼしき又深江の少深村の源光寺の本尊も天華にて
法明上人授けられたり其是非とあはれ又和泉国泉南郡も天華の依傍りて
其地六丁村月と巡番は毎月法會と切り

仁和寺渡口 一春村の上より松州仁和寺村より松州山下郡島御の一村より

仁和寺 右渡は場の一村あり寺あり仁和寺村と云

點野 仁和寺村の上より一とせ渡川より大洪水も當村の堤破壊

太間 點野村の上より日本紀に見ゆる杉子絶間の旧趾あり又大木集り出

木屋 太間村の上より松が鼻 木屋村の上より佐天より此西

三嶋江渡口 松が鼻の上より松が鼻島上郡三嶋江村より此西

出口 松が鼻の上より松が鼻島上郡三嶋江村より此西

蹠陀山天満宮 一向宗の寺あり松が鼻と号し東六條に属

本社祭神菅大臣

神像長四尺許
行者堂 稻荷祠 神樂所 共ニ社頭ニ

観音堂

鳥居の傍にあり 聖観音と安住 聖徳太子所作并ニ弥勒佛不動尊と
安住の傍にあり 社傳龍光寺観音堂の傍にあり

社傳云昌泰四年菅公流罪へ結遷しより

時御息女

菅公須戸神記 御父の別れと愁ひまひて此世を即り蹉跎し
昔公須戸神記 御父の別れと愁ひまひて此世を即り蹉跎し

冷み古跡よりし 蹉跎山と号し

文選より蹉跎と訓し 野詩の注ニ失題
蹉跎の山と号し 蹉跎の山と号し

後より御自作の神像と此より祭に崇敬し奉る所あり

意賀美神社

伊加賀村にあり 延喜式ニ出
例云九月九日

伊加賀 出口村の 伊加賀川 伊加賀橋

伊加賀

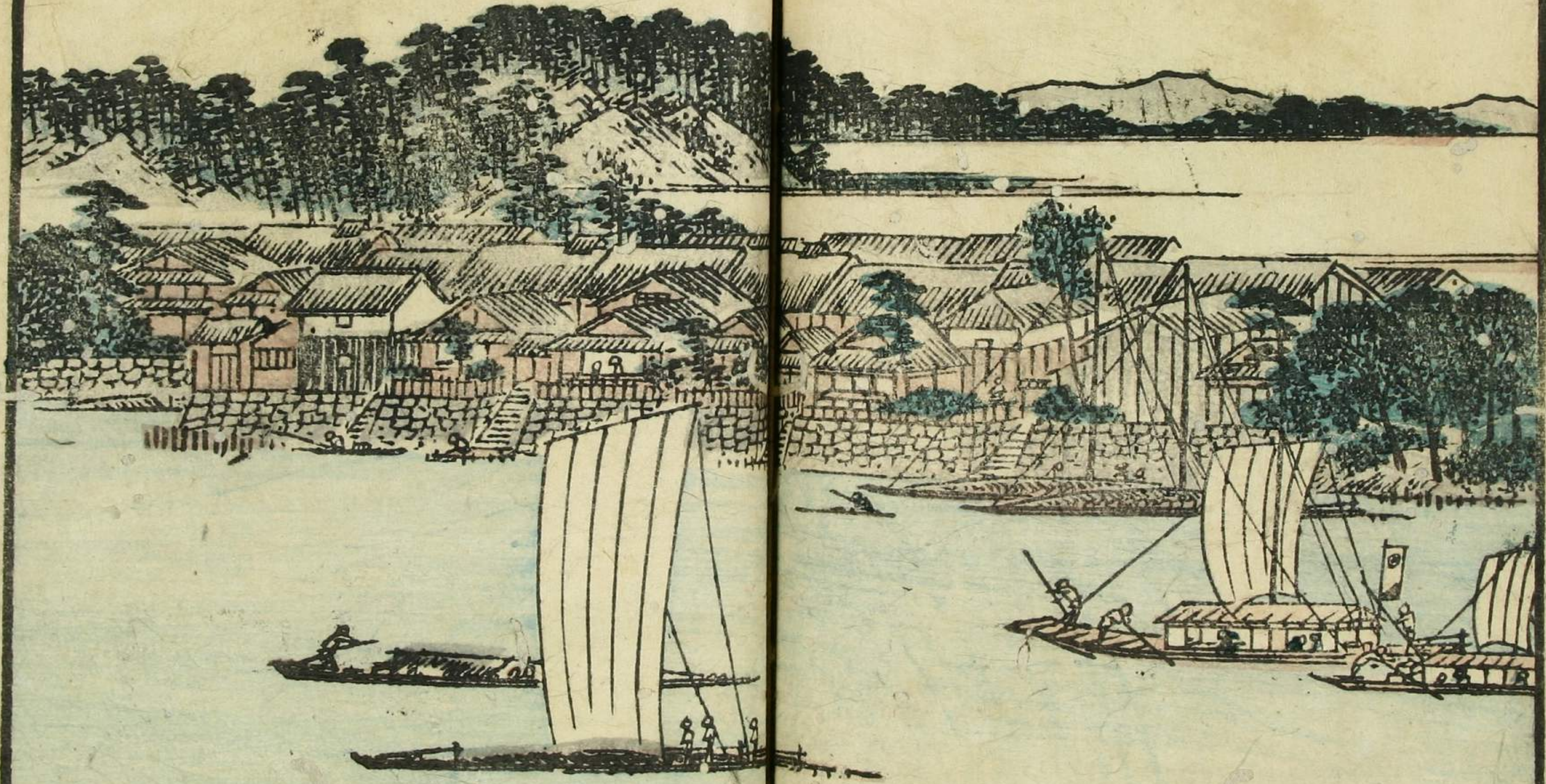
東堤の村より上り
松の水をホよとて枝方
までせりたり引上り
そぬより十五丁より
よして西境へよせ大橋の
下より上りて三丁より引
上りて松尾川に引上り
船のりて六丁より引上り
鴨居より上りて松尾川に引
上りて松尾川に引上り



其二
牧方駅泥町

土人買食
盪瓜皮嘲
罵募錢向
所欺捕惡
不嫌如爵
蠟恰供支
膝倦眠持

嶋掠隱



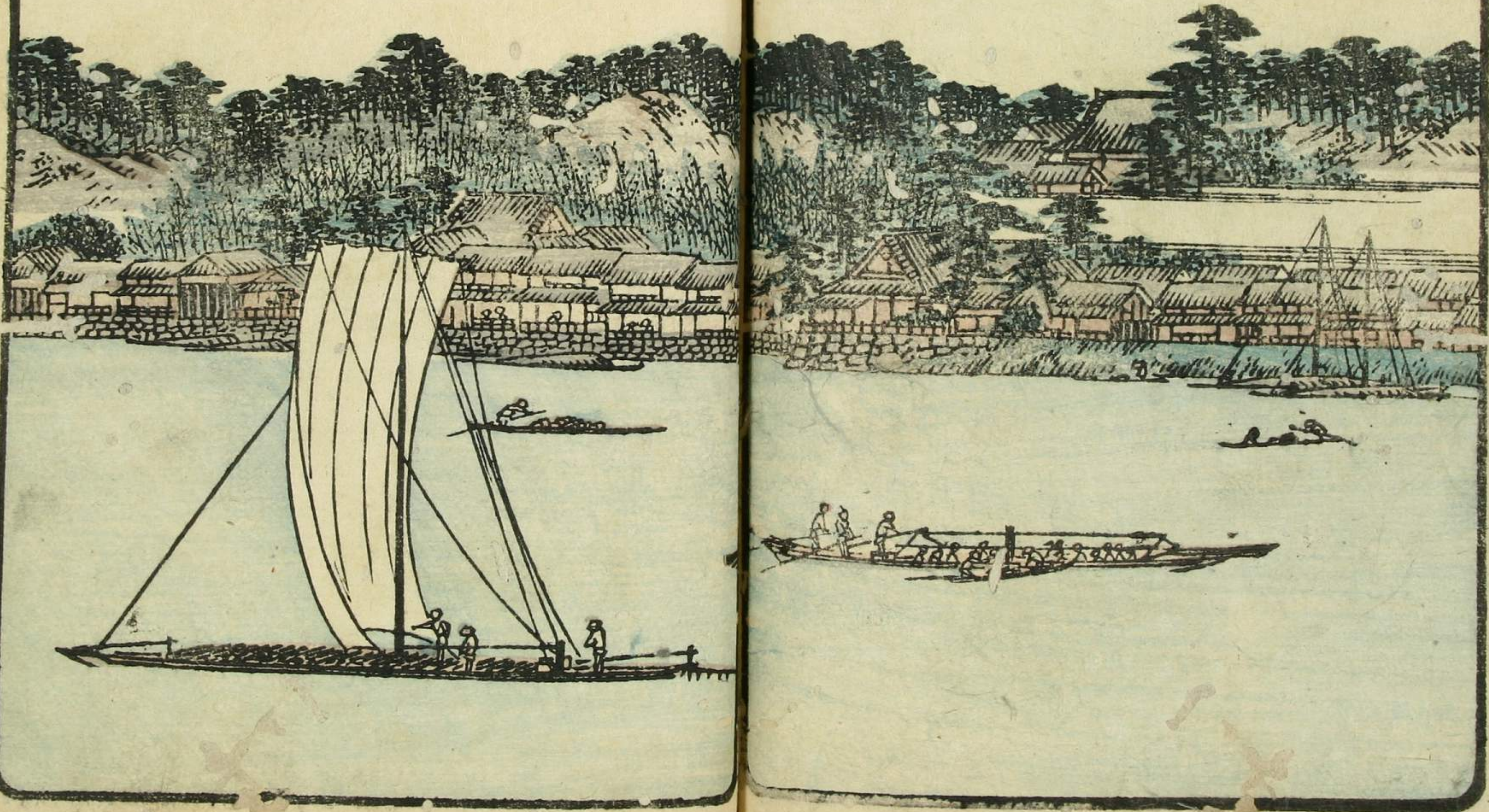
とるー知り
人の瓦る
口車つれ
酒百ふ
のりんの舟

江戸
早鉄東作

其三

まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ
まのめ まのめ まのめ

うり



ゆらゆら

ゆらゆら

ゆら

ゆらゆら

ゆらゆら

ゆら

ゆら

其四

牧方渡口

西大塚へ渡り

さびしき

舟より

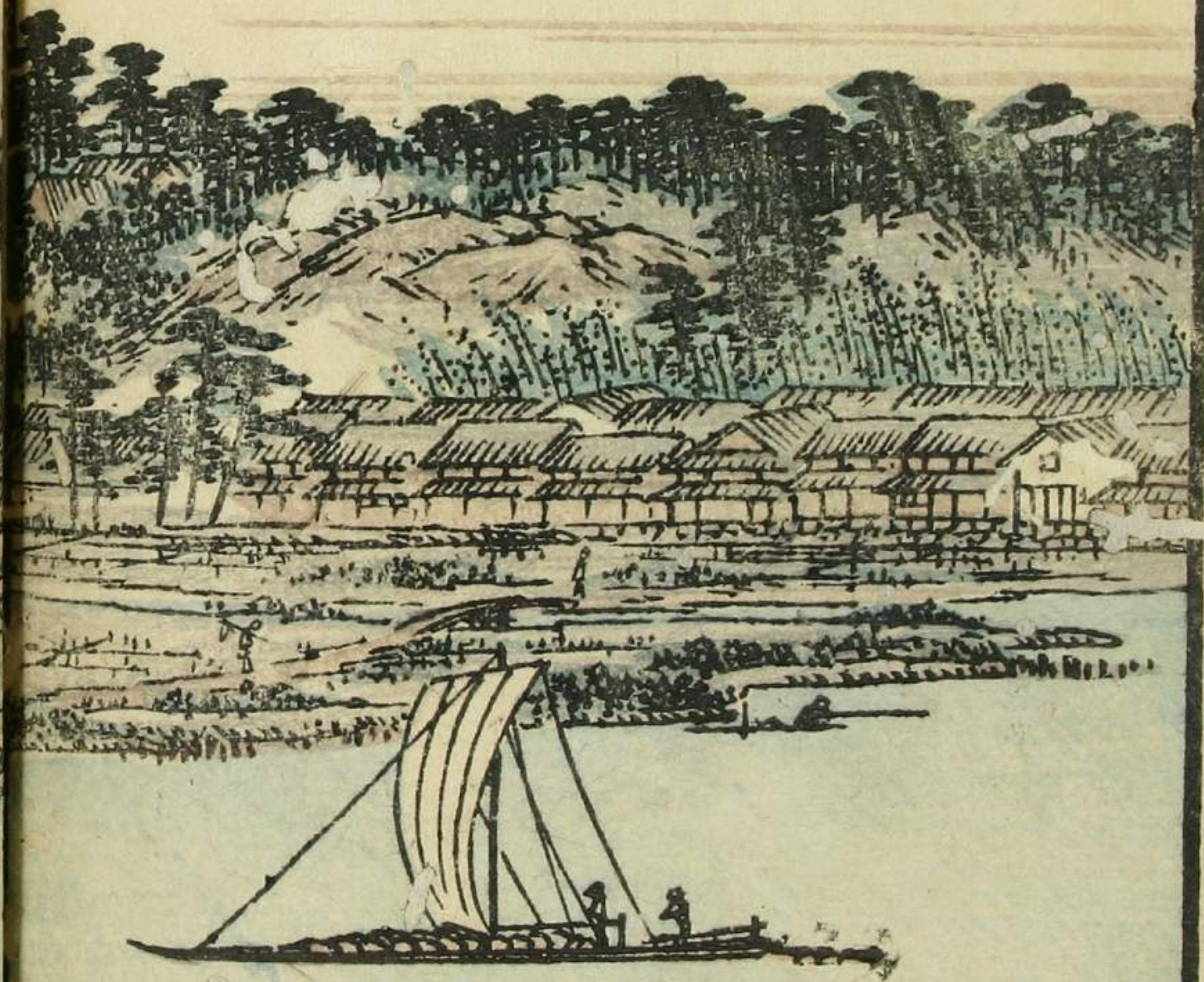
秋の

舟の語も

あつと

の会

有大甚



上
一
九
七

百里河堤

西又東蓬

窓夢破蘆

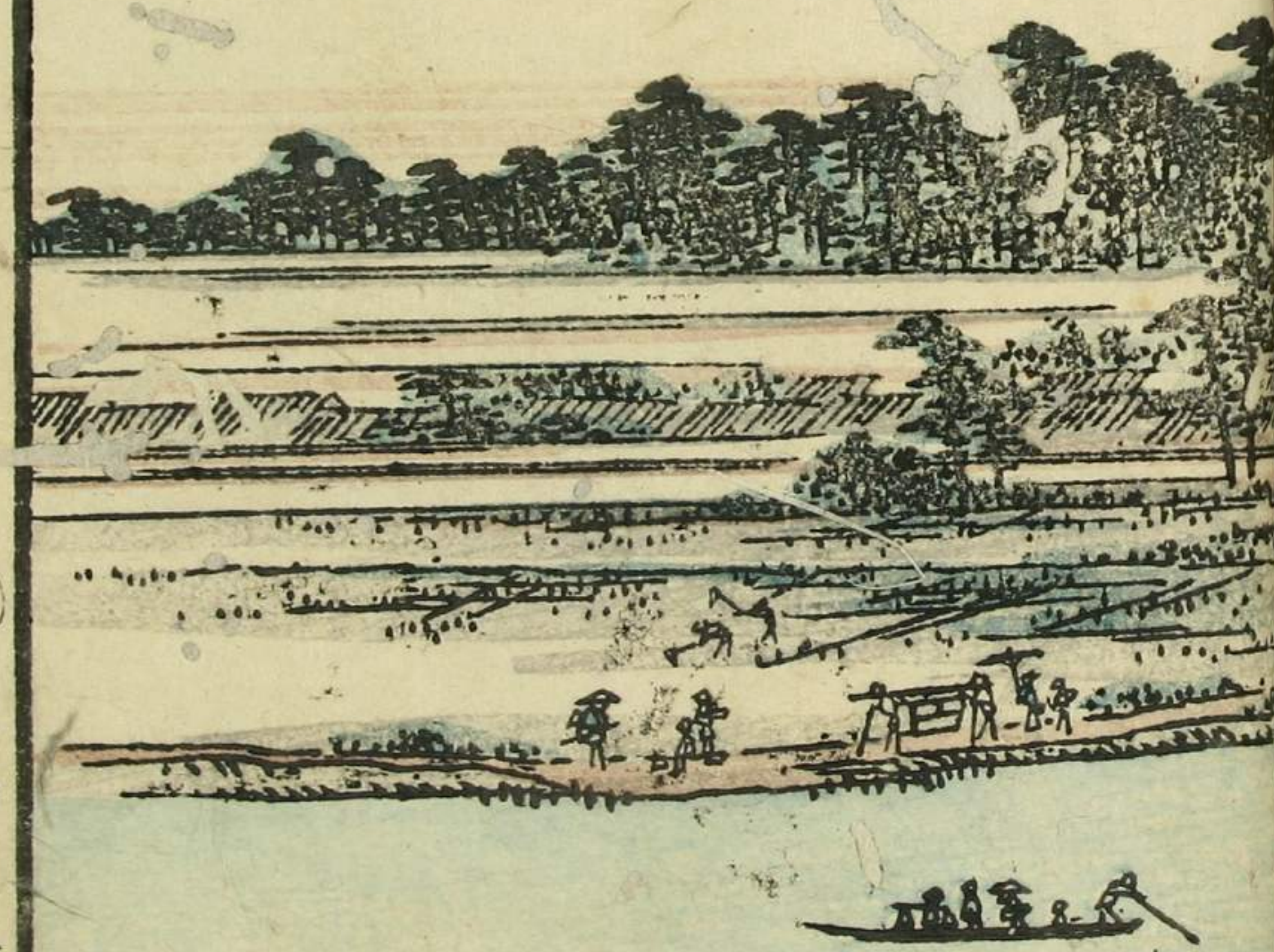
菰風鳥

嘲客鬢

餅不似滄

浪鼓拙翁

田



上
一
九
七

技方驛

伊勢 付丸く守口の取より番町へ陸路行程二里

此驛ハ京師派花の通路の久西国の諸侯方関東参勤の官道なるが

ゆへに結舎本陳茶店貨食家多く將飯盛の女をもりり

石夜りのに賑々々驛中泥町三矢岡新町等の小者坊にて

町後と願る長く並々の惣花より又両六條の所坊も皆々

東の願生坊といひ西の洋会寺といひ諸人常は向ひなき

貨食船の當所ハ名物も多し秋と春と昼と夜とさやうなる

船は飯酒汁餅さりと貯へ上り下りの通船と目づけり鑓やらの

物と其船は打りけ荒らうふお引のけ眠らあひ船客と起

し〜声かまびと〜酒食と高み傍よ〜れと鳴らん〜船

と号に往來の船よ〜〜風波の難なる時此舟〜漕つれ

出〜六と助ら役ありと由

琴の杖とら〜ん〜と起されてぬるるも夏の波の川舟 作基不嘉

酒うらよ夏やぶ〜れ〜あぢらな 梅圃

ゆ〜〜よ著乃〜〜〜〜〜 沾徳

〜〜の礎も〜〜〜〜〜 燈弁

御茶屋 御茶屋の中あり 天正の頃豊太の心は徳政を建てるよし

牛頭天王祠 同 美地町あり 移すの生 神は例年六月廿日 九月九日

長松山萬年寺 右天王の社願あり 本尊十面觀世音 春日作座像 長八寸

導師堂 本尊 瑠璃光佛 弘法大師作 行者堂 長小角と安を

此の江背惟喬親王清院さまより千八時田獵し給ひ鷹と故ち

うまは徳とれぬ山の 樹の根よもまきり巢と營うて雛を生じ

親王欽怡ありし時と折成ししより所將 給ひ給ふの長松山と

号に其鷹終に死しるれば此の煙草も終に死しるれば鷹

塚山とも号くともり又藏が谷と稱する 履中天皇の官庫の古

蹟ありと言傳へり尚本尊大慈尊像の末由藥師佛牛頭天王の

縁起ありともいふ事也 此が畧之

投方渡口 此より投別島上郡大深村に渡り毎より

監船所 投方の駅にあり 渡川の船と監視 京師角倉氏累世これと司ゆ

天川 投方の取中泥町に安岡新町とあり 人家の傍にあり 支野郡に属す 水邊 知別南田原星の森より出づ 投方入口より尾追水上九十二町

天川 志死りてより成ふより支野のより 五月雨の頃 為家

と云はれり 彼の望りてふかしの 雲の香や吹流 家隆

○禁野 天の川の岸あり 往昔延暦年中 帝は遊獵する國民を禽獸と

直塚 禁野村あり 惟喬親王御車と云

和回寺 俗に禁野の薬師と云 婦人産産を祈り 聖應り

本尊薬師佛 聖徳太子御作長三尺寸 脇土不動 此尊像より 攝列

四天王寺 在りて 弘法大師これに 遷し 其後貞観年中

文徳天皇第一の皇子惟喬親王 御兄に 遊獵の時三足の雉

波瀲院より 飛入り 歎け即これて 塚より築き 小祠と建させ 給ふ

今の鎮守とれり 其後康永の以 瘡蓋より 楠堂和田新発意

源秀再興の 園茲和田寺と 改む 什宝の 大師より 蹟の 両界曼荼羅

あり 寺前より 御禰の 榎あり 樹の 樹の 榎の 榎の 榎の

交野原 禁野 神宮 片鉾 小徳名あり 帝所 禰の 所あり 交野の

あれ 交野のもの あり 夜ねれ ねが ねが ねが ねが ねが

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

○磯嶋 禁野村の上より 氏一村の 指が 係上 郡に 属し 西の 名 指列ニ

○渚 磯嶋の上より 村中より あり

波瀲院古蹟 今寺とあり 十一面 觀世音を あり 真言宗の 樹とれ

守り堂しゅりどう五井橋いづみはし 杉止松すぎとまりまつのたきり又傍またわらに碑あり寛文元年十一月山列やまら渡
城主永井侯の舎弟同伊賀守宗頼杉井吉通建之銘日向陽孫子撰まがり

土佐書記 貫之士佐の住とてのありける道あり
あまのこの院の樹の花とていへり

君きみ多々おほくう紙かみろ宿しゆくの栲かし花はなひりの香かりを於お於お白しろひはる

かてゆくるの流の橋のくま終てこりり 竹たけこはるはる 倭やまと定さだ者もの

花はなのよのめりびりもあつてさや流ながの宿しゆくさううらん 俊しゅん成せい

渚しづ杜つ 渚しづ岡おか 渚しづの流ながの村むらと 渚しづの流ながの東あづまとりあすらづ

ひらめいしく入い流ながくらづづの渚しづの杜つの栲かし葉はひらるる

うらけ多おほく渚しづの五いの栲かし風かぜとさうも流ながのさううとぎぎー 信明朝しんみょうてい臣しん

坂さか川がわ 坂さか村むらのさうりう水みづ邊へ穂ほ谷やより出でるるとさう穂ほ谷や川がわより入いり未ま坂さか村むらより

坂さか 坂さかの辺へより天あまの川がわより此この西にしまで水みづ上うへ九く井せい三さん丁てい余よ

交野まの神社しんじや 坂さか村むらより近きん邑しやう八はち村むらの生なま土つち井いあり例れいは九月くわいげつ六ろく日にち此こ地ち浪なみ華なの良よしこ

本社ほんしや祭まつり神かみ牛うし頭あたま天あま王みこと 土つち入い河か内うち内うち 本地ほんぢ堂どう 本ほん社しやの左ひだり傍わらわより本ほんも帝てい釈しやく天てん

一いっ宮みや神かみ祠ひら碑いし 寛かん文ぶん丁てい己ぎ之の春はる菅すが原はら朝あさ臣おみ長なが親ちか 篆せん額がく 前まへ祠ひら祝い岡おか田た阜ふ撰せん
伏ふし見み岡おか田た宗そう興きやう建けん江え戸こ海うみ保ほ阜ふ鶴つる書かき 錦にしん文ぶん畧りやく之の

下しも嶋じま 坂さか村むらの上うへより 下しも嶋じま渡わた口くち 下しも嶋じまより新あらた殿との修しゆりの後のちの河か川がわと接つく

上かみ嶋じま 下しも坂さか村むらのさうりう

船橋ふねはし川がわ 上かみ坂さか村むらの端はたより水みづ邊へ荒あ坂さかの嶺ねりの南みなみより出でるる招まね提たい村むらと歴れきるる舟ふね橋はし村むら
より坂さか川がわより入いり坂さか川がわより此この西にしまで水みづ上うへ九く井せい十じゆ八はち丁てい六ろく間まとつつ

楠葉渡口

波の泡

くさくさ

はく

ゆき

宇鹿

ひらひら 波の泡
水まよふと 楠葉の
ゆき 波の上まで
一里余り 引のあり
又 舟のり
三丁余りのあり
又 草天つきま
水まよふと 西の
ゆき 波の上まで
ひらひら



往昔此川水勢すまアまくまと橋はしを架かけて遊あそぶりしふらう舟ふね橋はしと

つららくく往ゆ来きせしくく船ふね橋はし川がわといふとどど
今街屋より内へ入る

舟橋村とつらあり
去こ水みづやや此こ水みづもも波なみあらぬぬ天あまのの川がわ交ま野の辺へはは波なみもも舟ふね橋はし 光ひかり俊とよ

○桶之上いづのうへ 右みぎ川がわのの傍かたににりり南みなみ村むらのの東あづまにに舟ふね橋はし村むらあり二のの宮みやとと稱なづさる神かみ祠だいらありく

○楠葉くすは 近ちか隣りん三さんヶが村むらのの生なま上かみ津つとといふ例れい系けい九く月げつ九く日にち
樞しゆの上の上の上のりり 此こ水みづもも波なみあらぬぬ天あまのの川がわ交ま野の辺へはは波なみもも舟ふね橋はし 光ひかり俊とよ

元もと明めい大たい皇こう四し年ねん 月つき始はじ置お樟ちやう葉えつ驛えき 去これれがが往ゆ古こ 此こ所ところ取とりし
野のととつつのの又また樟ちやう葉えつ宮みやとといふ行ゆ宮みやとといふ日本にっぽん紀き見みてしりり

○楠葉渡口くすはわたぐち 月つき取とりしりり按あ洲しゆ島しま上の郡ぐん高たか濱はまにに渡わたりし故こににもも渡わたりしとといふ云いふ云
早はやくくくくふふとといふ人ひとのの渡わたりし故こににもも渡わたりしとといふ云いふ云

彌や勒りやく寺じ古こ趾し 楠くすは葉えつ村むらににりり一ひと名な足あ立た寺じとといふ云いふ云
山やま列りやく八はち幡はたのの古こ趾し見みてしりり

釋しやく迦か堂だう 月つき取とりしりり一ひと名な久く修しゆ園えん院いんとといふ号ごう以も本ほんをを叙じよ迦か佛ぶつ立た像ざう長ちやう六ろく尺せき
赤あか梅うめ檀だんとといふ云いふ云

藤ふじ原の繼ついで繩なは別べつ莊じやう趾し 月つき取とりしりり字あざとと名な原のとといふ号ごう以も本ほんをを叙じよ迦か佛ぶつ立た像ざう長ちやう六ろく尺せき
此こ別べつ莊じやうとと行ゆ宮みやとといふ云いふ云

金かね川がわ 月つき取とりしりり北きたのの傍かたににりり舟ふね橋はし川がわとといふ云いふ云
此こ川がわ河がわ内の 山やま城じやう兩りやう國こくのの境さかいにに

金かね橋はし 右みぎ金かね川がわとといふ北きた詰つめよりより山やま列りやく綴ついで喜き郡ぐんとといふ云いふ云
金かね橋はしのの上の上の上のりり按あ洲しゆ島しま上の郡ぐん高たか濱はまにに渡わたりし故こににもも渡わたりしとといふ云いふ云

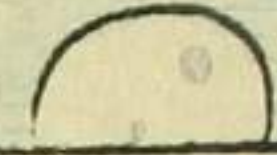
廣ひろ瀨せ渡わた口ぐち 凡およ九く十じゆ間まとといふ俗しやくにに下したのの渡わたりし故こににもも渡わたりしとといふ云いふ云
金かね橋はしのの上の上の上のりり大だい坂さか街まち道みちのの駅えきとといふ云いふ云

橋はし本ほん驛えき 此こ地ちにに往ゆ古こ山さん崎さきとといふ号ごう以も本ほんをを叙じよ迦か佛ぶつ立た像ざう長ちやう六ろく尺せき
其その橋はしのの詰つめとといふ云いふ云

此地このちにに往ゆ古こ山さん崎さきとといふ号ごう以も本ほんをを叙じよ迦か佛ぶつ立た像ざう長ちやう六ろく尺せき
其その橋はしのの詰つめとといふ云いふ云

此こ地ちにに往ゆ古こ山さん崎さきとといふ号ごう以も本ほんをを叙じよ迦か佛ぶつ立た像ざう長ちやう六ろく尺せき
其その橋はしのの詰つめとといふ云いふ云

橋本



山

山

月

海

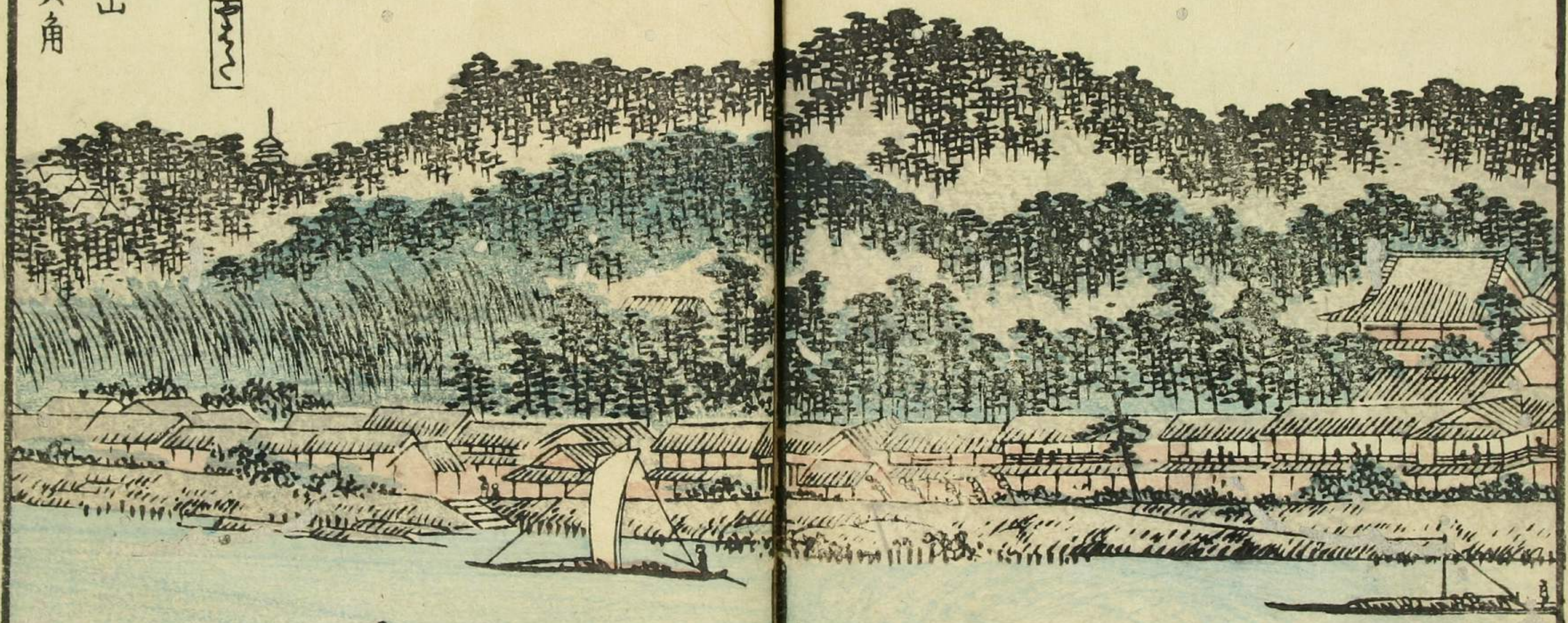
川

村

新
月
や
の
山

其
角

山



上
の
山

山

其二

八州の山並み

舟

波のひたす

作らぬ

人やたうらむ

古俳

瓦むけ

八帖と

くさくさ

尚白

神遊落々匹練

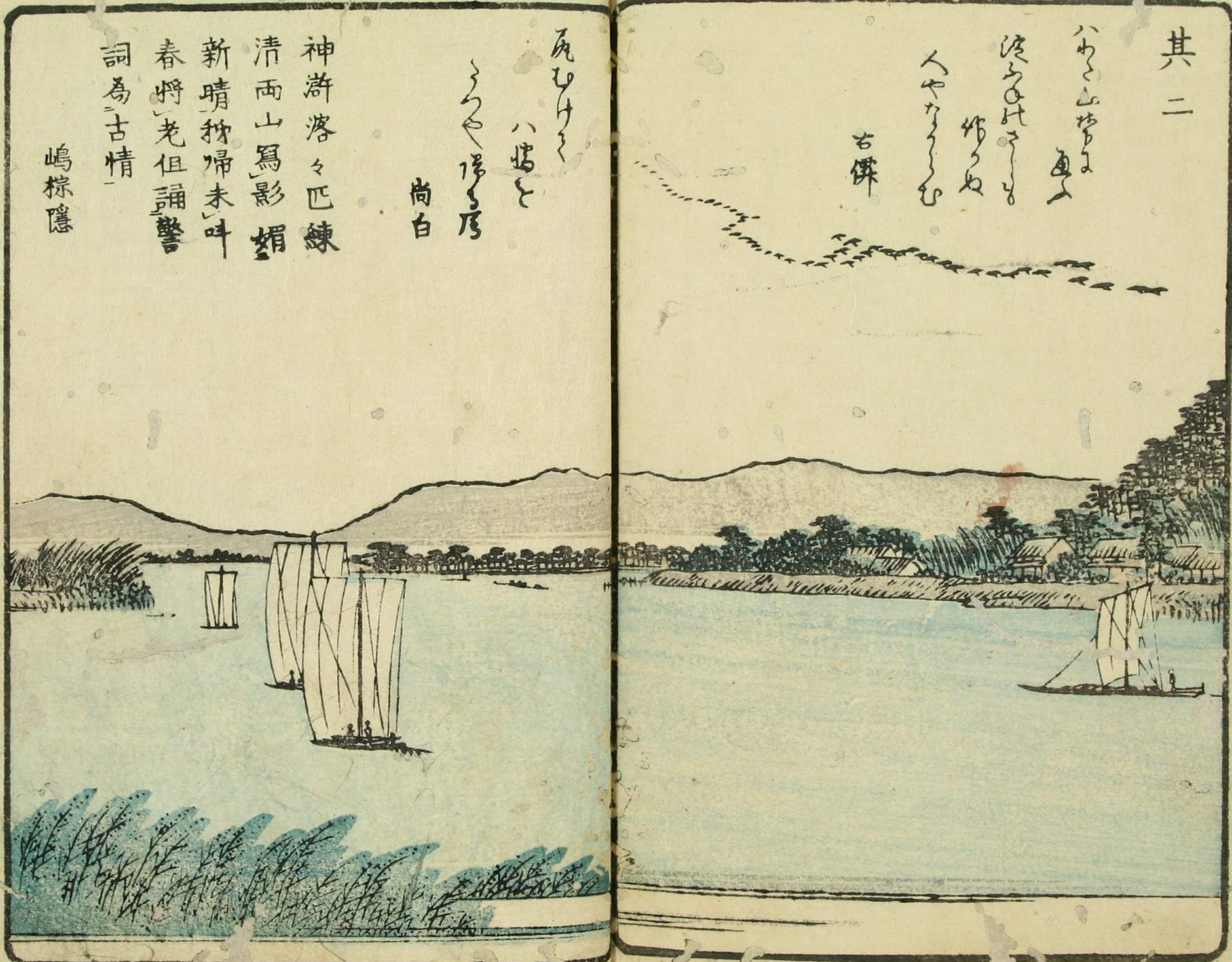
清両山寫影媚

新晴柳掃未叫

春將老但誦警

詞為古情

嶋棕隱



号く〜とぞ今中之町と〜は橋の渡はる山崎橋延喜式あり
文徳實録より出たり今ハ船〜と〜とカ

橋本渡口 右橋よりの〜川と山崎と〜又一説〜山崎の橋の〜

雄徳山奉詣道 八幡宮鎮座以前より在りとい傳ふ

掘之上 橋本の町と〜と〜名物の十重餅と

石清水正八幡宮 山列綴喜郡男山鳩嶺に鎮座あり一雄徳山と書け又嶺と香呂峯と

本社三座中央譽田天皇 又應神天皇と移り人王十四代仲哀天皇第四の太子

東之間 玉依姫 鷓鴣草曾不合尊の妃 西之間 神功皇后 應神天皇の

當山の神 鎮座ハ貞觀二年六月十五日筑紫宇佐八幡宮御託宣あり

我王城の辺に遷坐して風雨と守護一國家と安養る〜めん

言ひ〜よう 朝廷數悦びせまひ此他ハ神殿と管々永崇教〜

八幡の神号ハ抗案管崎験の松の下ハ八流の雄降下る赤幡四流白幡四流則其

譽田八幡丸と〜本社の後〜若宮ニ隣る宇礼姫具礼姫

水若宮 姫若宮の後〜宇治の皇子と 上高良社 本社の後〜

住吉社宝藏影向櫻 廻廊の 橘樹 前 有 楠樹 東廻廊の外〜

大塔 大日多室の 阿彌陀堂 大塔の 元三大師堂 神連舎 日向

狐渡口

遙天中斷
一川浮白
水青雲日
夜流風急
扁帆追去
鳥何人千
里向滄洲

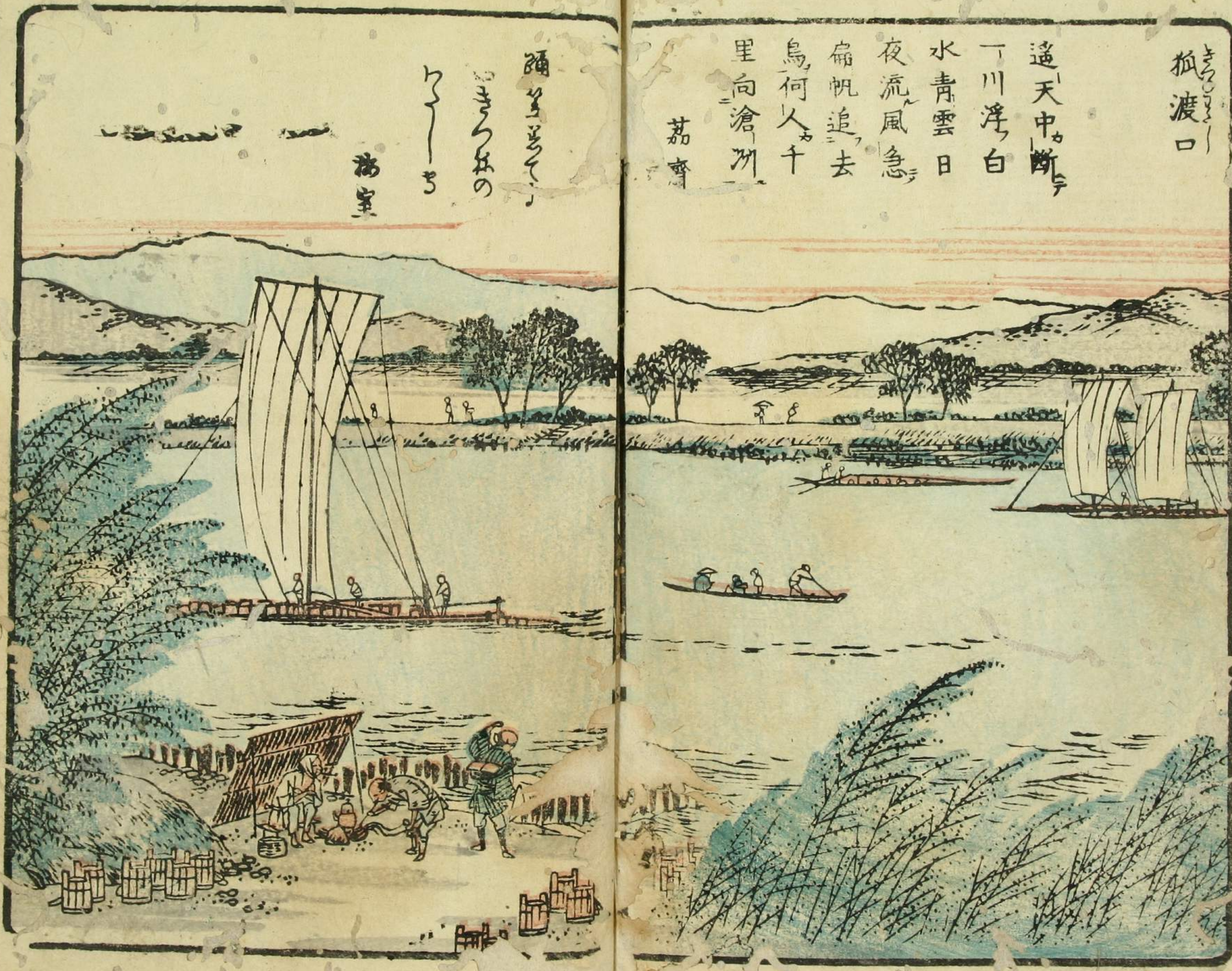
荔齋

彌生

の

り

為



琴塔 廻廊の外東ニあり毘沙門天と安ん 石清水 琴塔の下ニあり

松もあひ又も葎むを石清水の末とてつとまらるん 貫之

新 神垣やうけももろろ清水をせんちとせのまど久しと 為家

細橋 別當社の下ニあり石を布て橋の形とす 観音堂 兼師堂

瀧本坊 石清水のかさくろありね堂 愛染堂 三のまの 閑山堂

三鳥居 元三大師堂のあしあり石柱 正保二年正月徒四位下行信濃守

二鳥居 七曲の上ニあり高良社 藤大臣連保と

太子堂 七曲の上ニあり都人正月十 疫神堂 一のまのりり

本地堂 氏將末の廣目釘竹破魔子毛鐵木と求り

一鳥居 疫神堂の後門外ニあり八幡宮の類に佐理の

放生川 八月十六日放生行養ありて 高橋 又橋 安居橋

神宮寺 宿院科手の間ニあり大衆院と号し本寺千手観音神殿に神功皇后

放生會 例年八月十五日下院へ神幸ありて同日還幸して給ふあり

十六日放生川の河に社務ありて魚をとりて放生ありて程こ此

両日の遠近より詣人群集し宿院の辺より芝居放生下院橋の

物賣ありて尺地もあり市とありて神慮のあざむありて

新給

男山秋のうらやまのりん海原こころの舞

知家

臨時祭例年三月中午日あり

新給

ちりもせとちりもせの竹の太ふ人のかぐんこころ

定家

○科年

京相入の介うして 若宮八幡宮 科年相

狐渡口

八幡宮御奉向道のま居の傍より此うして 場切山別山郡 陽明寺村に渡る後川のまうして

一説に山崎の傍に 桓武帝即位三年は是と造る申頃より

淀の傍をかけてより此傍迄さういふ船渡とありて 狐渡と云

往古の人塚と南に移りて今も 狐の窟ありと云

